第7回みえの森フォトコンテスト審査員コメント

【写真家 松原 豊 審査員】

今回のフォトコンテストは過去最高の応募者数に恵まれました。応募者数が増えたことはこのプロジェクトへの関心が強くなってきている表れであるので非常に喜ばしいことです。応募者のみなさんにお礼を申し上げたいと思います。

小学生以下の部、中学生以上の部共に、最優秀賞は造形のおもしろさと森の多様性の力強さが写真で表現された写真が選ばれました。

小学生以下の部最優秀賞の「森のかみさま」は、最初に応募作品全体を見た時から強い印象が伝わってきました。この写真を見ていると恐竜などの骨の遺跡のようにも見えてきますね。観る側のさまざまな想像力をかき立ててくれます。タイトル名も良いと感じました。白黒写真にしてみると物の形態、フォルムが強調されて更に印象が強くなると感じました。

中学生以上の部最優秀賞の「足元の世界」は、ぐねっと曲がった樹木やその下にある苔などの小さな植物たちが絡みつきながら育っている様子の描写は、森の植生と力強さを感じさせてくれる作品でした。太陽の光の当たり方も良くこの植生の色を美しく演出していることも被写体の存在感の強さを上手く引き出していました。

小学生以下の部の作品は非常に構図のバランスの良い作品が多かったように感じました。構図の安定感が高かったのでしっかりと写真を見ることができましたがバランスが良すぎるようにも感じました。「写真を撮ってみよう!」と思う被写体に、多少構図がゆがんでも良いので少しアングルを変えたり近寄ってみたりしながら撮影することにもチャレンジしてみて欲しいと思いました。

中学生以上の部の応募作品で今回驚いたのは「カモシカ」と「蛇」と「鉄道」の存在です。私は「蛇」が苦手なのですが、応募作品は「蛇」をかなり近くで撮影しているように感じました。よく近寄って撮影できたなあ、と感心しました。審査会では「毒蛇でないことがわかっていて近寄れたのではないでしょうか?」という話が出ましたが、それでも被写体に近寄れない人には絶対に撮影できない写真です。(注意:被写体には無理して近寄らないようにしてくださいね)また、「カモシカ」も距離感が近いところで撮影しているようでしたのでよく撮影できたな、と感心しました。そして鉄道と森の写真が応募されているのには驚きました。「人と森の営み」ということを考えるときに「境界線」ということを考えたりするのに人工物と森の関係性というのは必要な視点だとも感じさせてもらいました。その3点の写真が入ることで「森」という存在が持ついろいろな役割や側面を感じることが出来るとともに、写真を見る人の想像力を刺激してくれました。それは「森」のもつイメージを広げてもらうことに繋がったと感じました。次回も新たなカメラアイで私たち写真を見る人の想像力をおおいに刺激してもらいたいと思います。

【三重大学部教育学部准教授 平山 大輔 審査員】

第7回目となる今回は応募数が一段と増え、200点を超えました。非常に嬉しく思います。小学生以下の部でも中学生以上の部でもとてもインパクトのある作品が多いと印象を受けました。特に中学生以上の部で、被写体や構図の多様性がこれまでよりも高くなり、「何を撮ったら良いかな」ではなく、自分の好きなものを撮ろうとしている意志が感じられ、審査をしていて楽しかったです。コロナ禍で人間社会はとても大きな影響を受けましたが、作品に写されている自然、森林の姿は普段通りです。近くの森林に出かけ、カメラを片手に木や岩、生き物などを見ることで、コロナと関わりのない自然の世界に気づくことができます。

これからも皆さんそれぞれに三重の森を見つめ続けてほしいと思います。

【みえ森づくりサポートセンター センター長 北野 信久 審査員】

出点数が増えただけでなく、作品の幅がぐんと広がったようで今後が楽しみです。森の中の生き物に焦点をあてたもの、背景として森林を使ったものなど、変化に富んだ作品の数々に感心するとともに楽しみながら審査をさせていただきました。ピントがきっちりあっていればとか、明るさが変わっていたらもうひとつおもしろいかなというものもありましたが、きれいな写真も多かった印象があります。入賞作品には森をじっくり見て、気づいたものがあり、それを表現しようと考えている様子がうかぶような写真が多いように感じました。

このフォトコンテストも第7回となりました。ますます応募数が増えますよう、第10回を目標に続けていけたらと思います。